

日本的アニミズムの展開

著者	金 容雲
雑誌名	日本研究・京都会議 KYOTO CONFERENCE ON JAPANESE STUDIES 1994 ?
巻	.non01-04
ページ	182-183
発行年	1996-03-25
その他のタイトル	Nihon teki animizumu no tenkai
URL	http://doi.org/10.15055/00003603

In comparison to the complexity of those writers Kawabata's expression is appreciated for its craft, delicacy, and hidden connections with tradition, but never for his reflections on Japanese historical experience. Before non Japanese eyes, more bolder spirits like those writers are considered better candidates to provide with an imaginative as well as philosophical statement on the meaning of being Japanese in a "foreign world".

Kawabata's unique contribution lies in an appeal to universal archetypes that help to build up an imaginative landscape where questions related to the times could be formulated by any reader without the need of calling for more conceptual devices or fixed answers.

日本的アニミズムの展開

金 容 雲 (漢陽大学校)

KIM Yong-Woon

民族は巨大な生命体であり、原初的な個性の強い文化意志、即ち原型を持つ。原型は変らない。しかし文明の発展と共にそれに適応して時代的な性格を帯びるようになる。個人に取っていえば「三つ子の魂」に相当するものが教育・社会的影響などによって洗練されてゆく過程にもたえられるであろう。西欧にはユダヤ・キリスト教的な原型があり、その一元論的思考が近代以後思想・科学の面でニュートン力学、フロイド心理学、マルクスの唯物史観などに大きな影響を与えて来た。

日本の原型の最も大きな要因としてアニミズム的思考を指摘することが出来る。「霊的・超自然的・神秘的なものが有機物・無機物を問はずあらゆる対象に存在するといふ宗教的・呪術的な意識の基本として特に原始信仰精霊信仰の形で存在した」のをアニミズムと言えよう。

自然的に存在するものに対する精霊信仰は特出した能力のある動・植物、又人間をも信仰対象とする。特に特出した能力に対する信仰は徹底した技能に対する献身の形にもなる。特に日本のアニミズム的傾向は畏怖の形を以て表われる場合に多い。「崇り」又は梅原猛の「地獄の思想」などがそれである。

古代の日本人のアニミズム的性格を表わすものとして重要な文献を二つあげることが出来る。

(A) 「…その地、多に螢火の光く神、及び蠅聲す邪しき神あり、復た草木咸能く言語ことある」
(『日本書紀』)

(B) 「大人の敬する所を見れば、ただ手を搏ちて跪拜に当つ……下戸、大人と道路に相逢えば、逡巡に草に入る辞を伝え事を説くには、あるいは蹲りあるいは跪き、両手を地に抛りこれが恭敬を爲す……」(『魏志倭人伝』)

(A)の内容は典型的な日本の風土の特徴を示す。これから精霊信仰が形成され、今日まで綿々と引きつながれている。神奈備信仰、八百萬の神などの存在がそれであり、柳田國男は『遠野物語』で農民の素朴なアニミズム信仰が数多くの民話の形で残されていることを示している。

(B)は、上イコール神とする思考のはじまりとも言える。特に「手を搏ちて跪拜に当つ」は現在神社の参礼の形とも相通ずる。弥生時代以来の開拓と征服の過程で生れたものと言えよう。特出した英雄・武将が信仰対象となり日本仏教の祖師信仰から現人神までの系譜がある。

又、アニミズム的・汎神論的思考は(A)と(B)の傾向を結合させ何処にも特出した献身は信仰の対象とさせた。

江戸時代の「石門心学」は士農工商それぞれに応じた信仰とその実践方法を説いている。E・フロムは「対象は何んであれ献身の対象は宗教化」するという。

一心、一所（生）懸命、一期一会、一辺倒、一隅を照す、一揆、一向（宗）、一乗、一途、一徹などの一を使った熟語は日本的なものであり他にはない。この思考はどんな小さい所（物）にも真理（超越者）が同時に存在しうるといった形になる、本居宣長の説「儒、又は仏を使いこなせばいつでも神になる」の思考もそこから出た。日本の仮名はハングルと同じ文字（万葉仮名・吏読）から同じ契機をもってつくられたにも拘らず三種類（カタ仮名、平かな、変態かな）に及んだのも同じ理由による。

湯川秀樹は「日本人は大局的思考に不適」であることを述べている。アニミズム的思考はむしろ小さなものに執着する傾向があるのは事実である。しかしそれが科学的でないというのは誤りであろう。日本人の最も合理的な思考を代表するものとして和算をあげることが出来る。和算の最も研究された分野は一つの円形の中に無限個の相接する円列をつくることであった。日本が生んだ名経営者盛田昭夫の「すきま産業論」と相通ずる思考法である。又世界的な業績ともいわれる今西錦司の「すみ分け理論」もその思考法の延長線上にある。日本の改良工学も同じといえよう。「民族の原型は変らない。しかし時代の変化に適應する」の命題を「日本的アニミズムの展開」の過程で考察する。

SUCCESS OF JAPANESE FAMILY PLANNING PATHWAYS TO BANGLADESH

Shireen AKHTER

Rural Health Service

Bangladesh is a country of baby boomers. Population growth is admittedly the no. 1 threat to the road towards development and existence of Bangladesh. The government anticipates a population of 115 million by the year 2000, growing to 175 by the middle of the next century. Just we can peep into the population size of Bangladesh and Japan at a glance: